

今よみ 農業 政治 経済

農泊が都市を救う

農業ジャーナリスト 小谷 あゆみ氏

農泊発祥の地、大分県宇佐市安心院町へ行って来ました。NPO法人安心院町グリーンツーリズム研究会は1996年から農泊をはじめ現在、60軒が参加しています。安心院では農泊を「農家民泊」ではなく、「農村民泊」の略だとしています。単に農家に泊まるだけでなく、農村を丸ごと体感する旅という考えなのでしよう。連なる山の麓にブドウ畑の広がる風景は郷愁を誘い、かつて、司馬遼太郎に「日本一の盆地」と言わしめたほどです。

ブドウ生産と観光農園「王さまのぶどう」を営む宮田静一さん、真佐子さん夫妻宅に泊まりました。真佐子さんの手料理に加え、焼きガキに大分産の力ボスを搾り、自家

心の安定や教育の場

製ワインの試飲までさせていただけました。これで1泊2食6800円で、農泊の売りは価格ですが、農泊の売りは価格やポリウムではありません。出発の朝、頂いたカードには、「一度泊まれば遠い親戚、十回泊まれば本当の親戚」と書かれていました。私の帰る場所が一つ増えました。

宮田さんは、観光庁が認定する観光カリスマに選ばれ、『しあわせ農泊』という著書も出しています。その中に、印象的な場面がありました。2泊3日の体験学習でやって来た女子中学生7人が、お別れの時に一斉に泣き出し、中でも最もおとなしそだった子が、「何でこんなに涙があふれるか分からない」と言っていて泣きじゃくったそうです。農泊の神髄は、ここにありと思っています。

どれほど一流の旅館やホテルで完璧なサービスを受けても、号泣するほどの感情は生まれません。お客さん、扱いで

(毎週火曜日付)